

『芸術の日本』 *Le Japon artistique* は、日本美術の啓蒙に尽力したフランスの美術商 S・ビング(1838 - 1905)により 1888 年から 3 年間、仏・英・独語で刊行された月刊芸術誌で、収録された愛好家による論文と作品の図版は、ジャポニスム研究における貴重な資料となっている。論文の内容は、絵画や工芸などの美術品のみならず、鑑賞のための知識としての日本の文化や歴史にも及んでおり、そこには当時の西欧における日本美術の捉え方についての豊かな情報が含まれている。しかし従来の研究では、副次的な資料として、収録論文の言説が取り上げられることがほとんどで、『芸術の日本』そのものを対象とした研究は少なく、また収録された日本美術に関する考察も十分になされていない。発表者は、浮世絵を研究する立場から、『芸術の日本』に掲載された、ビングらの眼で選ばれた日本美術に着目することにより、それらがどのように解釈されていたかを推測できると考えてきた。

この想定に基づき、本発表ではその一部として『芸術の日本』の表紙に注目する。表紙の図様は毎号異なり、その多くが浮世絵を借用しているが、典拠となった作品は明らかにされていない。そこでまず、それらの同定を試み、36 号中 26 号分を明らかにすることができ、また、典拠とした作品の図様をそのまま借用するだけでなく、図様を変容させているものが多数ある事が判明した。しかも変容のしかたは画一的ではなく、複数の作品のモチーフを組み合わせ、また主要人物を削除するなどの大胆な改変から、表紙のサイズに合わせるための細かな変化まで様々である。例えば、第 10 号の表紙では、清長と英泉の作品の図像が組み合わせられて、新たな浮世絵作品が作り出され、第 5 号の表紙では、栄之の作品の図様を変容させた結果、「七小町」の見立てという古典主題にもとづく趣向は失われて、洗濯風景を描いた風俗画へと変化している。これらの事例は、すでに借用の域を超えた引用と再構成となっている。

さらに取捨選択された図様からは、浮世絵がどのように見られ解釈されていたかを読み取ることができる。表紙における図様の変容のしかたは様々だが、全体として見ると、平面性の強調と、明確な日本的モチーフの抽出という傾向がある。典拠となった作品は、ビングらにとって、より浮世絵らしいと感じられるものへと変換されているのである。それは表面的な図様の改変ではなく、ある種の抽象化を伴うもの、すなわち模倣の段階を超え、彼らが体験し学んだ浮世絵の造形を祖述しているといえるだろう。

「ジャポニスム」は物珍しさへの熱狂に基づく異国趣味から、西洋美術の常識からの脱却と新たな芸術創造に関わるようになっていく。『芸術の日本』が刊行された19世紀末はまさにその過渡期といえる。『芸術の日本』の表紙から知られる、ビングらによる浮世絵の再構成は、この時期における西欧の浮世絵受容についての理解を深めるための一例となるだろう。